

柘植敬一郎

詩画文集・

王維の風姿

『王右丞
輞川集』全訳



詩画文集・王維の風姿——王右丞『輞川集』全訳*訳者栢植敬一郎
*装画者中村義人*発行一九九三年三月三〇日初版第一刷*発行者
鈴木一民発行所書肆山田東京都豊島区南池袋二一八—五—三〇—電
話〇三—三九八八—七四六七*印刷イナバ巧芸社第二整版印刷新有
写植社のざさ印刷製本山製本所*一〇九八—一三〇二—三四二四

目次

序 鎌田正 7

はじめに 11

「輞川集」とその序文 18
輞川集 并序 19

宮槐陌	茶夷汙	木蘭柴	鹿柴	斤竹嶺	文杏館	華子岡	孟城坳
王維	王維	王維	王維	王維	王維	王維	王維
48	44	40	36	32	28	24	20

同詠	同詠	同詠	同詠	同詠	同詠	同詠	同詠
裴迪	裴迪	裴迪	裴迪	裴迪	裴迪	裴迪	裴迪
50	46	42	38	34	30	26	22

花の解説
あとがき

椒園 漆園 辛夷塢 竹里館 北垞 白石灘 金屑泉 欒家瀨 柳浪 欽湖 南垞 臨湖亭

121 101

王維 王維 王維 王維 王維 王維 王維 王維 王維 王維 王維 王維

96 92 88 84 80 76 72 68 64 60 56 52

同詠 同詠 同詠 同詠 同詠 同詠 同詠 同詠 同詠 同詠 同詠 同詠

裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸 裴廸

98 94 90 86 82 78 74 70 66 62 58 54

柘植敬一郎

詩画文集・

王維の風姿

——王右丞『輞川集』全訳

書肆山田



臨王維輞川圖
張積素





傲郭忠恕臨王維輞川圖
王原祁



臨王維輞川図
商琦

序

愛知学泉大学教授柘植敬一郎君が、『王維の風姿』と題する『輞川集』の新訳を上梓することになった。同君と学縁浅からぬ私に取つての大きなよろこびであり、また読書界における一大福音である。

『輞川集』は、盛唐の詩人王維が、別荘のある輞川で、その景勝二十景を五言絶句で親友の裴迪と倡和連作した二十首ずつをまとめた詩集である。王維の詩は、現在三百八十四首が『王右丞集』に収められており、五言・七言の絶句や律詩及び古詩が歌われているが、著者が特に『輞川集』のみを選んで新訳を試みたのはなぜであろうか。

王維は、改めて言うまでもなく、遠くは東晋の陶淵明の流れを汲む、自然を愛好し、自然の美を歌った詩人として盛名を博しており、とりわけ五言詩に秀いでいるといわれるが、『輞川集』は、まさしく五言絶句に終始しており、彼が具体的に自然美を詠歎している詩は、この『輞川集』に結集しているとも考えられる。波瀾万丈、人生の順逆に悩まされた詩人王維の心を慰めるものは、名利を争う官途の生活ではなく、たくましくしてその美を現わしている花鳥山水の風物であり、それらは余すところなく都塵を去る輞川の地に求めることができたからであらう。

漱石が、『輞川集』の「竹里館」の詩に心を惹かれ、「只二十字のうちに優に別乾坤を建立してゐる」と評しているが、その別乾坤こそは、王維が詩人として、また、人間として求めた彼岸の境上であつた。加

えて、気のおけない親友裴廸との同趣の連作は、その楽しみを倍加したことであろう。

してみると、詩人王維の真骨頂は、この『輞川集』に求めることができるというべく、著者柘植君が、『王右丞集』の中から特に本集を選んだのは、ここに深く観るところがあつたというべきであるまいか。

さらに、本書の内容について特筆すべきことは、その新訳の斬新にして含蓄に富む文学的表現である。およそ漢詩ほど人によつて解釈の振幅を大きくするものはない。時代により人によつて、さまざま解釈や鑑賞の試みられているのはこのゆえである。著者柘植君は国文学者であつて中国文学を専攻するものではない。柘植君が本書を執筆しているとき聞いて驚いた私は、本書を繙いてさらに驚いた。従来中国文学者の試みた注釈とは明らかに一線を画する斬新なものであり、一言一句珠玉の連なりであり、訳文そのものが詩であり文学であり、味わえば味わうほど深い含蓄があり、詩人王維の風姿、彷彿たるを覚える。この格調の高い、清新な文学的潤いは、一朝一夕にして成るものではない。これこそ国文学に造詣の深い著者が、その豊かな学殖と鋭い文学的感覚を駆使した労作である。

本書の成るをよろこび、敢えて一言して江湖の諸賢に推奨する。

平成五年一月吉辰

東京教育大学名誉教授・文学博士 鎌田 正

REF

一

月耀如晴雪 月の耀^{かがや}くは晴れたる雪の如し
 梅花似照星 梅花は照れる星に似たり
 可憐金鏡轉 憐れぶべし 金鏡の転きて
 庭上玉房馨 庭上に玉房の馨れることを

〔菅家文草〕卷第一・川口久雄校註・『日本古典文学大系』本による

『菅家文草』十二卷・巻頭の「月夜見^三梅花」である。「時に年十一。敵君（父、是善）、田進士（是善の門人、文章生島田忠臣）をして試みしめ、予始めて詩を言へりき。かるがゆゑに篇の首に載^はめるなり」とあって、菅原道真、十一歳の時の始めての詩作と知ることができる。十一歳にしてこの詩があった。老生多時、なんぞ安逸を貪るべけんや、である。そこで、

月霽^はれて 雪明かりかとも
 梅発^{ひら}きて 星の降るかとも
 月 天にめくるめけば ああ
 梅白く 庭に馨れる

と、訳してみた。

二

「李白一斗詩百篇」（杜甫・『飲中八仙歌』（六））と言う。

私も、酒の上でのしくじりは人後に落ちず、数うるにいとまないが、その最たるものは、階段を昇りわずらい、まろび落ち、頭を割って入院したことであろう。急性硬膜外血腫。全治一カ月。昭和五十七年九月三十日のことである。お蔭で、脳中に新風を通わすを得、その後は、かえって、以前より頭がよくなったと言いつらしている（とか）。いや、まだある。その四、五年前にも、地下鉄と相撲を取って（シラフではとてもできることではない）、左肩を折っている。このときは、通院ですんだが、あれ以来、お蔭で、左がとみに強くなった（とか）。右肩だったら、どうだっただろう？

ここで李白のことだが、李白は、或るときに船遊びに、天子のお召しを受けたが、酔余、船に上るを得ず、高力士によく扶けられて、『臣は酒中仙』と自称した（前出、『飲中八仙歌』（六））という。このあたり、李白と私という勝負であらうか。

「酒飲むな」と言われても、酒飲みは、所詮、酒をやめることができないのか、竹林七賢の一人・晉の劉伶にも、次のような有名なエピソード